

論文

フランツ・カフカの〈動物物語〉における寓話性について

山 尾 涼

要 旨

1953年に発表されたアドルノのフランツ・カフカに関する論文では、その作家の作品をひとつの「寓話」Parabelとして捉えることが可能かどうかというベンヤミンの提起した問題が引き続き論じられている。カフカの物語の寓話性に関する議論は、これ以降も現在に至るまで多くのカフカ研究者らによって行われてきた。本論では従来の先行研究の議論を整理した上で、イソップの動物寓話 Tierfabeln について研究したレッシングの *Abhandlungen über die Fabel* を参照しつつ、カフカの〈動物物語〉の寓話性に関する新たな解釈の可能性を提示する。イソップの動物寓話の特徴との位相の元にカフカの〈動物物語〉を眺めれば、それがいわゆる啓蒙主義的な道徳的命題の提示を目的として描かれたものではないことが明らかとなるものの、では〈動物物語〉はその寓意性を通じて読者に何をほのめかしているのか。カフカの『小さな寓話』と『寓意について』という2つの断片を手掛かりに探っていく。

キーワード：フランツ・カフカ、動物物語、寓話、寓話性、『小さな寓話』、『寓意について』

目 次：

はじめに 〈動物物語〉とその寓話性の問題

1. カフカの〈動物物語〉の寓話性に関するゾーケルとエムリッヒの主張
2. Gleichnis と Fabel の定義
3. 『小さな寓話』の場合
4. 『寓意について』の場合 まとめ

はじめに 〈動物物語〉とその寓話性の問題

アドルノ (Theodor Adorno) のカフカ (Franz Kafka) 研究は、ベンヤミン (Walter Benjamin) のカフカに関するエッセイを礎として展開された。彼は 1942 年から 53 年に亘って論文を執筆し続け、その成果を 1953 年度 *Die Neue Rundschau* の 3 冊目に *Aufzeichnungen zu Kafka* というタイトルで発表した。この論文では、カフカの物語はひとつの「寓話」Parabel として捉えることが可能かどうかというベンヤミンの提起した問題が引き続き論じられている。アドルノはカフカの物語の持つ寓意性について以下のように述べている。

彼の友人 [ブロート] の抗議にもかかわらず、カフカの散文は象徴よりもむしろアレゴリーを目指すことから、社会的な保護を奪われたものたちと関係がある。ベンヤミンがその散文を寓話 [Parabel] として定義したのには理由がある。カフカの散文は、表現によってではなく、表現することを拒否することによって、またはある中断によって自らを表現する。それは開くための鍵が盗まれている寓話世界なのだ。Kafkas Prosa hält es, trotz dem Protest seines Freundes [=Brod], auch darin mit den Verfemten, daß sie eher der Allegorie naheifert als dem Symbol. Benjamin hat sie mit Grund als Parabel definiert. Sie drückt sich nicht aus durch den Ausdruck sondern durch dessen Verweigerung, durch ein Abbrechen. Es ist eine Parabolik, zu der der Schlüssel entwendet ward; [...].¹⁾

カフカの物語の寓話性に関するこのような議論は、アドルノやベンヤミン以降にも、エムリッヒ (Wilhelm Emrich) やゾーケル (Walter H. Sokel), ヒーベル (Hans H. Hiebel) といった主要なカフカの研究者の間でも取り上げられてきた問題である。カフカの物語の寓話性の孕む問題とは、作家自身が〈動物物語〉と呼んだ、動物が物語の筋書き上重要な役割を持つその作品群において最も顕著に表れている。本論ではまず先行研究の議論を参照した後、イソップ (Äsop) の動物寓話 Tierfabeln という系譜との位相の元にカフカの〈動物物語〉の持つ寓話性の特徴を浮き彫りにする試みを行う。

1. カフカの〈動物物語〉の寓話性に関するゾーケルとエムリッヒの主張

エムリッヒは、カフカの晩年の〈動物物語〉には人間が登場せず、動物の視点の元に物語が描かれるという意味において〈動物物語〉としての純粋性が増していることを指摘す

る。²⁾ だが実際のカフカのテキストでは、主人公が動物であってもいわゆる自然の動物そのものとしては描かれていない。その点についてはもちろんエムリッヒ自身も以下のように補足している。「他方ではしかしこれらの動物たちは、人間の諸問題を生き、なおかつ省察している。」Andererseits aber leben und reflektieren diese Tiere die Probleme der Menschen.³⁾ カフカの〈動物物語〉の動物たちは、元はアレクサンダー大王の乗り物に過ぎなかった馬が弁護士となって法学の研究に励んだり、1匹の犬が世界の謎を探究したりと身体的には動物であるが、精神的には人間と同等のレベルにある。その他の動物たちも自身の芸術家像を追求したりと、動物たちの取り扱う問題や課題は動物の次元を超えている。

そのように主張した後エムリッヒは、カフカの〈動物物語〉をイソップ寓話と同一線上に捉えることを否定した。「それでもなお、これらのカフカの動物たちを単純に人間と同一視すること、そして動物が人間の諸状況を映し出し、動物の装いの中に道徳的で賢明な教訓が表現されるようなイソップ寓話 [Fabeln] の再形成をそれらの中に認めることは誤りであろう。」Dennoch wäre es falsch, diese Tiere Kafkas einfach mit Menschen zu identifizieren, in ihnen eine Weiterbildung der Äsopischen Fabeln zu sehen, wo Tiere menschliche Zustände spiegeln und moralische Weisheitslehren in Tierverkleidungen ausgesprochen werden.⁴⁾

イソップの寓話に関しては後で詳しく述べるものの、その特徴を端的に言えば社会と人間の諸相を皮肉と風刺とを織り交ぜて、動物像に寄せつつ描き出すという文学的特性があるといえよう。これらを踏まえたうえで他方ゾーケルは、カフカの〈動物物語〉について、「その寓話において人間的な特性が動物キャラクターらによって体現されている。」In der Fabel werden menschliche Eigenschaften durch Tiercharaktere verkörpert. という理由から、イソップの寓話の特徴を継承していることを主張する。⁵⁾ そしてエムリッヒの見解に対して、「ヴィルヘルム・エムリッヒはカフカの動物像の中に本来的で実在的な自己そのものを認めたがる。」Wilhelm Emrich will in den Tiergestalten Kafkas das eigentliche, existentielle Selbst schlechthin sehen.⁶⁾ との反論を行った。

この2つの先行研究のまったく相反する主張に対して、本論はどのような立場をとりうるのか。また、エムリッヒとゾーケルの2人はイソップの寓話を引き合いに出してはいるものの、それがどのような特性を持つものであるのか詳細に論じていない。一言に日本語で寓話といってもドイツ語では Fabel, Parabel, Gleichnis もしくは Allegorie というように分けることができる。これらの点を順を追って確認していく。

2. Gleichnis と Fabel の定義

Gleichnis としてカフカの〈動物物語〉を読む可能性についてだが、それについてはカフカ自身が1917年5月12日にブーバー (Martin Buber) へ宛てて書いた手紙が手掛かりとなる。カフカは、親友ブロート (Max Brod) の知人であったシオニストのブーバーから、彼の編集する雑誌 *Juden* に作品を投稿してほしいとの依頼を受けた。*Juden* とは1916年4月から刊行されたシオニズムの雑誌で、当時ブロートも制作に協力していた。

当初シオニズム運動とは一定の距離を保って接していたカフカであったが、ブロートとその知人からの頼みとなれば断わり切れず、『ジャッカルとアラビア人』*Schakale und Araber* と『あるアカデミーへの報告』*Ein Bericht für eine Akademie* の2作品を寄稿することにした。するとブーバーは、その2作品に共通タイトルとして「寓話」Gleichnisse はどうかと尋ねる手紙をカフカに送る。それに対するカフカの返答が以下の引用である。

さて、こうしてわたしも „*Juden*“ に参加しましたが、いつもこんなことはありえないと考えていました。これらの作品を、喩え話 [Gleichnisse] とは名付けないよう、お願いいたします。そもそもそれらは喩え話ではありません。もし共通タイトルが必要でしたら、「2つの動物物語」がもしかすると最上かもしれません。So komme ich also doch in den „*Juden*“ und habe es immer für unmöglich gehalten. Gleichnisse bitte ich die Stücke nicht zu nennen, es sind nicht eigentlich Gleichnisse; wenn sie einen Gesamttitel haben sollen, dann am besten vielleicht „Zwei Tiergeschichten“.
(B 299)

この文章からはまず、そのタイトルからも宗教的色彩の明らかな *Juden* に自分の作品が掲載されることになってしまった事実へのカフカの戸惑いと、そのことによって2つの作品が、宗教的な喩え話と捉えられることへの懸念とが読み取られる。

カフカは自分の作品を「喩え話」Gleichnis ではないと語るが、Gleichnis の辞書での定義をみると、*Duden* では以下のように示されている。「[…] 抽象的な考え、あるいは事象を、はっきりとしていて具体的なストーリーで [教訓的な意図で] 喩えることによって分かりやすくしようとした、短くて具象的な物語。」[...]: kurze bildhafte Erzählung, die einen abstrakten Gedanken od. Vorgang durch Vergleich mit einer anschaulichen, konkreten Handlung [mit belehrender Absicht] verständlich machen will: [...]」⁷⁾ とある。

また *Campe* を参照すると、Gleichnis について以下のように書かれている。

Das Gleichniß

1) ある人物や物事を表現させようとしている、もしくは少なくともその事物との類似を備えているべき像。[...] また別の意味では、何かの実質を伴わない姿。1) Ein Bild, welches eine Person oder Sache darstellen oder doch eine Ähnlichkeit mit ihr haben soll. [...] In weiterer Bedeutung, von einem unkörperlichen Bilde. [...]

2) ひとつの像の下で、ある物事をイメージで喩え、そのイメージで分かりやすくしようと試みた語り方。喩え話 (Parabel)。ある物事を比喩で包むこと。ある人に喩え話を語ること。含蓄に富んだ比喩。喩えは喩えという表現は、喩え話がぴったりと合わないことを意味する。喩え話で、もしくは喩え話によって語ること、もしくは喩え話で精緻な話を表現すること (Parabolisieren)。比喩表現は比較表現よりもより完全に詳細であることで区別される。アーデルング⁸⁾によれば他の事柄の非本来的な、もしくは具象的な観念を含む語が比喩と呼ばれるが、しかしながらそのような用いられ方は特例である。南部ドイツ語ではこの語はしばしば、女性名詞で die Gleichniß となる。2) Eine Rede, durch welche man eine Sache unter einem Bilde, mit welchem sie verglichen wird, deutlich zu machen sucht; eine Gleichnißrede (Parabel). Eine Sache in ein Gleichniß einkleiden. Einem ein Gleichniß geben. Ein sinnreiches Gleichniß. Das Gleichniß hinkt, paßt nicht in allen Theilen. In Gleichnissen oder durch Gleichnisse reden, feine Reden in Gleichnisse einkleiden (Parabolisieren). Das Gleichniß ist von der Vergleichung so unterschieden, daß es vollständiger ausgeführt ist, als diese. Nach Ad. [=Adelung] wird auch schon ein Wort, welches eine uneigentliche oder bildliche Vorstellung einer andern Sache enthält, ein Gleichniß genannt, welcher Gebrauch jedoch ungewöhnlich ist. -Im O. D. [=Oberdeutsche] lautet dies Wort häufig die Gleichniß.⁹⁾

Campe の 1) の定義は、あるものの似姿としての意味を指し、2) では喩え話としての概念が示されている。Duden の定義にあるように、Gleichnis には教訓的な意図が含まれる。また、2) ではそのような喩え話を Parabel の同義語として捉えているが、Parabel とは元はラテン語の名詞 parabola をドイツ語化したものであり、『羅和辞典』によると「1. 比較, 対置。2. 寓言, ことわざ; 比喩。3. 風刺詩, 嘲歌。」¹⁰⁾ を意味する。

また、Hermann Paul の *Deutsches Wörterbuch* で Gleichnis を調べると、以下のように記されている。

Gleichnis N., [...] 本来「他と比較しうるもの」、シラーの例はこの一般的な意味「狩

猶は戦闘と比べられるもの」、それゆえかつては、„Vorbild“（手本、模範；範例、典型）（「神という手本に従って」ルター訳聖書創世記 5, 1）、„Nachbild“（（どんなものにしてその姿を写し取った）形・像、形象）「あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない、どんな形をも作ってはならない」ルター訳聖書出エジプト記 20, 4「人間として形成されたものは神性の形を保有している」ゲーテ『親和力』20, 293, 10；「すべて過ぎ行くものは、形象に過ぎない」ゲーテ『ファウスト』12104）現在では„Parabel“（譬）の意味のみ（ルター以前の聖書のドイツ語訳ではそのように使われ、ルターはそれをマタイ伝 13, 3で受け継いだ：「そしてイエスは譬で多くのことを語る」）。Gleichnis N., [...] eigentl. „was sich mit etwas anderem vergleichen läßt“, in diesem allgemeinen Sinne bei Schi. *die Jagd ist ein G. der Schlachten*; daher früher „Vorbild“ (*nach dem G. Gottes* Lu. Gen. 5, 1), „Nachbild“ (*du sollst dir kein Bildnis noch irgend ein G. machen* Lu. Ex. 20, 4, *daß das Menschengebild... das G. der Gottheit an sich trägt* Goe. Wv. 20, 293, 10; *Alles Vergängliche ist nur ein G.* Goe. F. 12104), jetzt nur „Parabel“ (so auch schon in der Bibelübersetzung vor Lu., von der er es Mt. 13, 3 übernimmt: *und er redet zu jnen mancherley durch Gleichnisse*).¹¹⁾

この辞書による定義でも Gleichnis の意味が Parabel と同じであることが示されている。またここで例に挙げられた「イエスは譬で多くのことを語る」という聖書からの引用によってもわかるとおり、Gleichnis という言葉には、宗教的な教訓話との繋がりがあっても確認できる。カフカがブーバーに宛てた手紙の中で、自分の2つの〈動物物語〉を喩え話 Gleichnis ではないと否定したのは、そのような宗教的な教訓を込めたものではないという意味があったのだと考えられる。

したがってこのカフカの発言は、〈動物物語〉には宗教的解釈は相応しくないということ、そしてそれを教訓的な物語としてのいわゆる道徳的寓話 *sittliche Fabel*¹²⁾ のジャンルとして捉えてはならないという2重の否定を意味しているのだとみなしうる。道徳的寓話とは、寓話の研究を行ったレッシング (Gotthold Ephraim Lessing) による分類のひとつである。彼はまず寓話を単一的寓話と複合的寓話の2つに分類し、そこから道徳的寓話と理性的寓話、神話的寓話、超自然的寓話の4つのジャンルを派生させた。その中のひとつである道徳的寓話とは、物語中の行動人物が人間ではなく、本来理性を持たないもの、例えば動物といったものが登場し、筋に道徳的命題が含まれているものを指す。

1759年に発表されたレッシングの寓話研究とは、イソップの寓話の特徴を挙げ、それを基に個々の作品を細かいジャンルへと分類していくことによって、その物語の持つ機能

を明らかにしようとするものである。彼は「寓話」Fabelを、以下のように定義している。「それゆえわたしはすべてを総括して次のようにいう。わたしたちが普遍的、道徳的命題を特別な状況へと還元し、その特別な状況に現実性を与え、そしてそこから普遍的命題が直感的に認識されるひとつの物語を作り出すならば、その作り話は寓話と呼ばれる。」Ich fasse daher alles zusammen und sage: Wenn wir einen allgemeinen moralischen Satz auf einen besondern Fall zurückführen, diesem besondern Falle Wirklichkeit erteilen, und eine Geschichte daraus dichten, in welcher man den allgemeinen Satz anschauend erkennt: so heißt diese Erdichtung eine Fabel.¹³⁾ [強調：原著者]

これはすなわちイソップの寓話すべてに下された定義であるのだが、イソップの寓話だけに限定されるのではなく、レッシングによると寓話というジャンル全体にも適用される。これによると寓話 Fabelとは、普遍的命題とともに、道徳的な命題も併せ持たなくてはならない。この寓話 Fabelの定義にはたしてカフカの〈動物物語〉が当てはまるのかどうかについて検討するため、適した判断材料となりうるのがブロートによって『小さな寓話』*Kleine Fabel*と名付けられた断片である。これは猫とネズミという2種類の動物のみが登場するいわゆる〈動物物語〉であり、1920年晩秋頃に執筆された。「紙片集」*Konvolut*と呼ばれるばらばらの紙の束からの記述である。¹⁴⁾非常に短い物語なので、全文を引用する。

3. 『小さな寓話』の場合

「ああ、」とネズミは言った。「世界は日が経つにつれて、狭くなっていく。初めのうちはそれ[世界]は、不安を感じるほどに広がった。先へと進んで、ついに遠くの右左に壁がみえたことは幸せだった。しかしこの長い壁は、余りにも早く互いに狭まっていき、自分はもう最後の部屋にいる。そしてその角には、わたしが落ちようとしている罠がある。」—「走る方向をかえないと」と猫は言い、ネズミを食べた。„Ach“, sagte die Maus, „die Welt wird enger mit jedem Tag. Zuerst war sie so breit, daß ich Angst hatte, ich lief weiter und war glücklich daß ich endlich rechts und links in der Ferne Mauern sah, aber diese langen Mauern eilen so schnell auf einander zu daß ich schon im letzten Zimmer bin und dort im Winkel steht die Falle, in die ich laufe.“ „Du mußt nur die Laufrichtung ändern“, sagte die Katze und fraß sie. (NSF II 343)

この物語は一見すると、典型的な動物寓話の形式に当てはまるかのようである。レッシ

ングは動物寓話の特色について、動物を登場人物にすることで冗長な性格描写を回避する点を挙げている。例えば、歴史上の人物であるプリタニクスとネロを登場させても、彼らについて良く知らない読者らにとっては両者がどのような関係にあるのか理解できず、すべての読者から同一の観念を引き出すことが困難である。しかし、プリタニクスとネロの代わりに羊と狼といえは両者がどのような関係にあるのか読者は直観的に理解することができる。寓話 Fabel と呼ばれる物語はすべてこのように、読者が物語から直観的認識によって命題を把握できなければならないのである。¹⁵⁾

『小さな寓話』では猫とネズミという動物らを登場させることによって、典型的な捕食者と非捕食者という単純な力関係の図式を誰でも読み取ることができる。また、物語の中でいかにも知恵が備わっているかのように振舞うネズミが、自分からあっさりと猫の元へと飛び込んでしまう愚かさも、現実にはネズミは賢さの点で猫に劣るという共通の認識があれば理解しやすくなり、読者が命題を把握することの助けとなる。また、ネズミや猫が人間のように言葉を話すことも、動物寓話の中では動物は人間の理性と言語を持っていることが前提であるというレッシングの挙げる特徴と一致している。¹⁶⁾

『小さな寓話』とレッシングが論じた動物寓話の特性との、このような外見上の一致からはあたかも以下の様な命題が導き出されうるかのようである。ネズミは形而上学的な思考に囚われていて、盲目的な状態へと陥っている。それによって現実には目の前にある些細な危機でさえ回避することができない。つまりこの物語は、そのネズミの愚かしさを通して物事を正しく認識することの重要性を示している。またネズミよりも賢い動物である猫から最後に掛けられる、「ただ走る方向をかえない」という教訓的な言葉からは、自省することの重要さと、常に生き方を改めていくことの大切さという道徳的命題を提示しているのだと読みうるのである。そのように道徳的命題を見出す解釈を『小さな寓話』で行えば、この物語をイソップ寓話のジャンルへと結び付けてしまうことも可能となる。プロートがこの断片を寓話 Fabel と名付けたのも、このような従来の寓話の特徴との重なりからではないかと推測できる。しかしここで疑問に思うのは、この物語の言わんとしていることとは、本当にこのような道徳的な命題なのであろうかということである。

この『小さな寓話』にはイソップの寓話にはない気味の悪さ、つまり後味の悪い不安な印象や危機感がある。また猫の存在には、読者に示唆を与える教訓的な存在という印象よりも、ネズミの矮小さをあざ笑うかのような不気味さが漂う。物語のほぼ大半は、ネズミの嘆きによる一人称である。物語の不安感や危機感はこのネズミの嘆きから生じている。もしこの物語がイソップの動物寓話のような道徳的命題を提示することだけを目的として書かれているのなら、ネズミが世界崩壊感にも似た感覚を訴えたり、避けられない危機を嘆いたりする必然性はあまりない。

したがってこの『小さな寓話』は、上で論じた道徳的命題とはまったく逆のことを読者に直観させることを意図しているのではないかと読みうるのである。逆のこととはつまり、物事があるがままに認識することの不可能さ、またそれに従って自省し生き方を改めることの困難さである。カフカは1918年から1920年に亘り、物事を本質的に正しく認識することの困難さをアフォリズムという形で記し続けた。その中の物の見方もしくは直観に関するアフォリズムのひとつが、この物語を理解する助けとなりうる。

「11/12 例えばひとつのリンゴについて抱きうる見解の相違。食卓の上のリンゴをかるうじてわずかにでも見るために、首を伸ばさなくてはならない少年の見解と、リンゴを手にとって食卓仲間に自由に与える一家の主人の見解。」 11/12 Verschiedenheit der Anschauungen, die man etwa von einem Apfel haben kann: die Anschauung des kleinen Jungen, der den Hals strecken muß, um noch knapp den Apfel auf der Tischplatte zu sehn und die Anschauung des Hausherrn, der den Apfel nimmt und frei dem Tischgenossen reicht. (NSF II 115f.) このアフォリズムから読み取られうる少年と主人の眼差しの高低差による事物の見え方の違いは、そのまま猫とネズミの視線の高さや、そこから受け取る情報の認知のされ方へと繋がる。

ネズミが走りだした頃の世界は周囲に何もなく、不安を感じるほど広がった。しかしネズミはやがて先に猫が待ち受ける袋小路へと向かっていくのだが、ネズミの視点は低く猫の姿を捉える事ができない。一方、高い目線から周囲を見渡すことのできる猫は、ネズミが自分の足元へと走り寄ってくることに気が付いていて、後はネズミが走ってくるのを待ち構えておけば万事思惑通りという状態である。そしてネズミがそれに気がついた時には時すでに遅く、餌になるほかネズミに道は残されていない。猫とネズミは同一の環境に存在していても、そこから読み取りうる周囲の情報量には差があつて、両者の事物の見え方は主人と少年のリンゴの見え方のように自ずと異なる。ネズミの死の原因は物事を正確に認識する能力の低さにある。また情報量に関して以外にもこの物語からは、あらゆる生き物が秘めている、死へと必然的に引き込まれてしまう破滅的傾向も読み取られうる。

そうした破滅への不可避性を生み出す原因のひとつには、生き物が事物を認識して判断することの不完全さが根本にあるということをこの物語は暗示している。ありとあらゆる物事を、ありのままに主観を挟まず把握することが不可能であるという点では、人間もネズミも同様である。『小さな寓話』は、ネズミの嘆きと死という結末を通して、我々の現実の世界に対する認識がいかに狭く間違つたものであるのか、またそれによって、場合によっては避けることのできるすぐ目の前の罠でさえ自ら陥ることもあるのだということをも明らかにしている。また同時に、ネズミが視点を高く保つことができないように、また人間も常に正しい認識と判断に沿って生きるなどということは絶対に不可能であるという絶

望的な命題が示されているのである。猫の最後の言葉がまるで、ある人物にとって不可能なことを、そうと知りつつあえて口にするかのような皮肉として聞こえるのも、この物語がそのような生き物の不可能性を暴く物語であるからに他ならない。

したがってまとめれば、カフカの〈動物物語〉の持つ寓話的特徴とは、形式の上ではレッスングの論じたイソップの動物寓話の特徴と重なるのだが、内容に関しては、その物語を通して啓蒙的な道徳的命題を明示することを避けているという点で異なる。むしろカフカの意図とは、人間が絶対的に避けることのできない様々な囚われ、例えば『小さな寓話』の場合では、間違った認識という否定的なものを暴露することにあるのだと読みうるのである。

4. 『寓意について』の場合 まとめ

ヒーベルは、カフカの物語の持つ寓話的な特徴について、寓話 Parabel の性質を述べながら以下のように指摘している。

広げられた比喩 [Gleichnis] ないし「詳細なメタファー」に基づいている寓話 [Parabel] とは、強調することと教訓的であることによって際立っている。つまり寓話は、予期しない、難解な真実を示している。カフカの場合には、教訓的な寓話 [Lehrparabel] は、「からの寓話」 [Leerparabel] へと変わる。つまり「空虚な」、もしくは「ネガティブな寓話」へと。Die Parabel, die auf einem ausgedehnten Gleichnis bzw. einer „ausgeführten Metapher“ aufbaut, zeichnet sich durch Pointierung und Lehrhaftigkeit aus; sie verweist auf unerwartete, schwer faßbare Wahrheiten. Bei Kafka verwandelt sich die Lehrparabel in die ‘Leerparabel’, d. h. in die „leere“ oder „negative Parabel“ [...].¹⁷⁾

カフカの物語は、教訓の抜け落ちた「からの寓話」であるとするヒーベルの指摘は、その寓話的性質を説明するには的を射ているが、この言葉だけでは物語の内容の重みを説明するには十分ではない。¹⁸⁾ またすでに参照したゾーケルとエムリッヒの議論に戻ると、エムリッヒのいうように、カフカの〈動物物語〉をイソップの動物寓話の系譜へと直接的に結び付けることも、そこには道徳的命題が抜け落ちているという点で疑問が残る。かといってエムリッヒのように動物たちを、人間の日常性を超越したポジティブな可能性に満ち溢れる領域圏に存在するものとして読むことも、また喩えを喩えのままに捉えすぎることになるのではないだろうか。比喩を比喩で語るにより結局は無意味へと陥る状態と、

またはその反対として日常的な事柄のみに思考を奪われてしまい、抽象的な思考を一切拒絶してしまった両方の状態を、カフカは『寓意について』*Von den Gleichnissen* というごく短い断片で描いている。この題名もブロートが名付けたもので、執筆時期は1922年から1923年頃だと推測されている。¹⁹⁾

賢者の言葉がいつも単なる比喩に過ぎないと多くの人が嘆いている、という文章からこの物語は始まる。物語の冒頭部分の語り手である「わたしたち」は、賢者が「彼方へ行け」„Gehe hinüber“ (NSF II 531) と語る時、それはただ単に向う側へ渡れ、という意味ではなく、「なにかしら架空の彼方」*irgendein sagenhaftes Drüben* (NSF II 531f.) を意味していることは理解できると語る。しかしそれ以上のことは分からず、賢者自身もそれより他に言い表せないで、結局は「わたしたち」の何の役にも立たないと嘆く。そして以下の文章によって物語の前半部分は締め括られる。「そもそもこのようなあらゆる喩えは、捉えられないものは捉えられないということを言いたいだけであって、そんなことはわたしたちも知っている。しかし本来わたしたちが日々苦勞していることとは、別のことなのだ。」*Alle diese Gleichnisse wollen eigentlich nur sagen, daß das Unfaßbare unfaßbar ist und das haben wir gewußt. Aber das womit wir uns eigentlich jeden Tag abmühen, sind andere Dinge.* (NSF II 532)

物語の前半部分では、すでに引用した「なにかしら架空の彼方」と、語り手である「わたしたち」の生きている「日々の生活」*täglichen Leben* (NSF II 531) が対置されていることがわかる。つまりこの語り手は、「なにかしら架空の彼方」と「日々の生活」がまったく別のことだと考えているということである。しかし「なにかしら架空の彼方」という言葉の意味を、この言葉のみを取り上げてその語の指し示す内容のすべてを把握することは不可能である。だがこの比喩を比喩としてのみ受け取るのではなく、語り手の世界そのものである「日々の生活」へと結び付けることによって、架空の彼方にある意味が開けてくる可能性があることに語り手は気付いていない。語り手の思考からは、解釈をするという行為そのものが欠落しているのである。

カフカの物語も、まるで『寓意について』の賢者の言葉のように、捉えられないものは捉えられないと語る、ヒーベルの言葉を借りれば「からの寓話」であると読むこともできるし、日常からかけ離れたことをいっているのだと読むこともできる。しかし結局は捉えた言葉とその意味を、人間の生の諸問題と結び付けて解釈する他に作品を理解する方法はない。ベンヤミンの以下の文章は、本論のこのような主張を補うものである。

カフカの作品は喩え話 [Gleichnisse] ではない。そして、それ自身として受け止められることも望まない。[...] わたしたちは、カフカの喩え話に付き添われ、K. の身振り

や動物たちの振る舞いにおいて注釈される教義 [die Lehre] を所有しているのだろうか。教義はここにはない。[...] いずれにしてもここで問題となっているのは、人間の共同体における生と労働の組織化の問題である。Sie sind nicht Gleichnisse und wollen doch auch nicht für sich genommen sein; [...] Besitzen wir die Lehre aber, die von Kafkas Gleichnissen begleitet und in den Gesten K.'s und den Gebärden seiner Tiere erläutert wird? Sie ist nicht da; [...] In jedem Falle handelt es sich dabei um die Frage der Organisation des Lebens und der Arbeit in der menschlichen Gemeinschaft.²⁰⁾

ベンヤミンがカフカのテキストの提起する問題を「生と労働の組織化」の問題だといっているように、本論の観点からするとカフカの物語が人間の生に纏わるありとあらゆる絶望的な状況を、読者にいかなる「教義」も提示しないまま表出するものだとすれば、それはカフカの〈動物物語〉が絶望の物語であることの印である。したがってカフカの〈動物物語〉は、イソップから伝承されてきた動物寓話とは一線を画すものであり、同時にそれがカフカの〈動物物語〉の独自性を生み出している。

また『小さな寓話』の例に戻れば、通常生物学的にほぼ覆しようがない猫とネズミという両者の力関係が、他の登場人物や救済的手段の一切描かれることのない極度に閉ざされた物語世界の中で描かれているということが重要である。あらゆる生き物はいかなる方法においても抗うことのできない強大な世界の掟、規範、または他者との関係というシステムそのものによって生の周囲を取り巻かれているということが、ネズミにとって永遠に強者であり続ける猫という存在の絶対性と、それに対置される弱者としてのネズミという構図の中に凝縮されている。カフカは主にその長編小説の中で、司法組織や資本主義社会体制という超越的な審級と主人公との軋轢を描くことを通じて、社会と個人との相容れない現実的な構図を描き出した。『小さな寓話』の場合においても、関係を覆すことの不可能な超越的存在との遭遇と破滅という長編小説と共通する主題が、寓話的構造の中に描出されている。動物を主人公にして描くというカフカの第一の意図は、動物を主人公とすることによって物語内の図式を単純化して細かい描写を省くという点にあるが、通常理性で当たり前のように受け入れられている物事を、理性を持たない生き物へと敷衍させて描くことによってその自明性を読者に問わせるという作用もあるだろう。今回導き出された結論を引き続きカフカの〈動物物語〉へと今後は個別に応用し、作品解釈のさらなる深化を図る。

【使用テキスト】

本論中のカフカのテキストからの引用は、括弧内のアルファベットと頁数で示した。

- Kafka, Franz: Briefe. April 1914–1917, Bd. 3. Hrsg. von Hans-Gerd Koch. Frankfurt am Main (Fischer) 2005. (B)
- Kafka, Franz: Nachgelassene Schriften und Fragmente II. Hrsg. von Jost Schillemeit. Frankfurt am Main (Fischer) 2002. (NSF II)

註

- 1) Adorno, Theodor W. : Aufzeichnungen zu Kafka, in: Gesammelte Schriften in 20 Bänden. Kulturkritik und Gesellschaft I Prismen/Ohne Leitbild. Hrsg. von Rolf Tiedemann. 1. Aufl. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1977, 10/1 Band, S. 255.
- 2) Emrich, Wilhelm: Franz Kafka. Frankfurt am Main (Athenäum) 1960, S. 151.
- 3) Ebd.
- 4) Ebd.
- 5) Sokel, Walter H. : Franz Kafka. Tragik und Ironie. Frankfurt am Main (Fischer) 1976, S. 20.
- 6) Ebd.
- 7) DUDEN »Das große Wörterbuch der deutschen Sprache« in 10 Bänden. Hrsg. von Wissenschaftlichen Rat der Dudenredaktion. 3., völlig neu bearbeitete und erweiterte Auflage. Mannheim-Leipzig-Wien-Zürich (Duden) 1999, 4 Band. Gele-Impr., S. 1534.
- 8) アーデルングとは、18世紀を代表するドイツの言語学者・文法学者であるヨーハン・クリストフ・アーデルング (Johann Christopf Adelung) による独辞典を指す。『ドイツ語史小辞典』によればアーデルングは、「上部ザクセン方言を話す上流階級のドイツ語を標準ドイツ語の規範にすべきであるとし、「標準ドイツ語とは何か」の議論に一応の終止符を打った。」とある。荻野蔵平, 齊藤治之編著: ドイツ語史小辞典 (同学社) 2005, 4頁。
- 9) Campe, Joachim Heinrich: Wörterbuch der Deutschen Sprache in 6 Bänden. Hrsg. von Helmut Henn. 1. Aufl. (Hildesheim) 1969, 2 Band. F-K., S. 399.
- 10) 田中秀央編: 羅和辞典 (研究社) 1966, 427頁。
- 11) Paul, Hermann: Deutsches Wörterbuch. Völlig neu bearbeitet und erweitert von Werner Betz. 5. Aufl. Tübingen (Max Niemeyer) 1981 [1. Aufl. :1897], S. 267.
- 12) Vgl., Lessing, Gotthold Ephraim: Über die Fabel, in: Gesammelte Werke in 10 Bänden. Hrsg. von Paul Rilla. 1. Aufl. Berlin und Weimar (Aufbau) 1968, 4 Band, S. 55–57, 61–63.
- 13) Lessing, S. 45.
- 14) Pasley, Malcolm/Wagenbach, Klaus: Datierung sämtlicher Texte Franz Kafkas, in: Kafka-Symposium. Berlin (Klaus Wagenbach) 1965, S. 69f.
- 15) Vgl., Lessing, S. 50–52.
- 16) Vgl., Lessing, S. 50.

- 17) Hiebel, Hans H. : Franz Kafka: Form und Bedeutung: Formanalysen und Interpretationen von Vor dem Gesetz, Das Urteil, Bericht für eine Akademie, Ein Landarzt, Der Bau, Der Steuermann, Prometheus, Der Verschollene, Der Proceß und ausgewählten Aphorismen. Würzburg (Königshausen & Neumann) 1999, S. 25. またヒーベルは具体的な作品のモチーフを挙げてカフカの物語の寓話性を以下のように説明している。「カフカのメタファーにはアレゴリーや、寓話 [Parabel] の傾向がある。『巣穴』(文化としての巣穴, 芸術の創作活動としての巣穴, 避難所) や、『流刑地にて』(罰の審級としての社会, 罰の惑星としての世界), 『城』(閉ざされたものの領域, 官僚支配の勢力圏) 等といったテキストは、抽象的なこと, 概念的であること, そして擬人化の諸要素がその中に入り込んでいるという意味において寓意的な特徴を具えている。」 Kafkas Metaphern haben eine Tendenz zur Allegorie und zur Parabel. Texte wie „Der Bau“ (Der Bau der Kultur, Der Bau als Kunstschaffen, Das Refugium), „In der Strafkolonie“ (Die Gesellschaft als Strafinstanz, Die Welt als Strafplanet), „Das Schloß“ (Der Bereich des Verschlussenen, Die Sphäre der Bürokratie) usw. tragen allegorische Züge in dem Sinn, daß Momente der Abstraktheit, Begrifflichkeit und der Personifikation in sie eingehen. Im Besonderen spiegeln diese Bilder Allgemeines. Ebd.
- 18) ヒーベルは別の論文で、カフカの物語の寓話性について以下のように述べているので引用しておく。「カフカの形式はほとんど例外なくジャンルの伝統を横断している。したがって彼の寓話的であることは、滑るような比喩的表現, 暗示的な寓話的解釈, 心理学の循環と結び付いているのである。」 Kafkas Formen liegen fast ausnahmslos quer zur Gattungstradition. So ist es selbstverständlich, daß sein Parabolisches sich verbindet mit der gleitenden Metaphorik, der andeutenden Allegorese, dem psychologischen Zirkel. Hiebel, Hans H.: Die Zeichen des Gesetzes. Recht und Macht bei Franz Kafka. München (Wilhelm Fink) 1989, S. 53.
- 19) Pasley, Malcolm/Wagenbach, Klaus: Datierung sämtlicher Texte Franz Kafkas. in: Kafka-Symposion. Berlin (Klaus Wagenbach) 1965, S. 74.
- 20) Benjamin, Walter: Benjamin über Kafka: Texte, Briefzeugnisse, Aufzeichnungen. Hrsg. von Hermann Schweppenhäuser. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1981, S. 20.